

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	朝の会議と午後の引継ぎ、毎月の職員会議等で日々のケアを話し合い職員の意識合わせや確認を行っている。管理者は日々の様子を視たり、毎日リーダーから報告を受けながら理念の実践に向け助言している。	「地域社会につながる居場所作りのサポーターとなり、入居者の心に向き合った生活のパートナーでありたい。」という誰にも解る理念が掲げられている。玄関やユニットの壁にも張られており、来訪者にもわかり易くなっている。毎月第一週に行われる職員会議でも統一感を保つように確認し合っており、理念にそぐわない言動があった場合には管理者から声をかけ注意を喚起している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	社会福祉協議会と連携し資源を活用しながらホームを開放している。理科大学生や高校生の実習現場として受け入れを続けている。歌、踊り、楽器の演奏など習い事の発表場所としての訪問や見学に訪れる数も増えており住民との交流の機会は多くなっている。	高校生などの実習を受入れている。自治会の役員とは折にふれ協力関係を保つようにしている。ホーム近くの花卉栽培農家からいただいたカーネーションを持参していただく近所の方もいる。市社協に登録しているボランティアには声がけすればいつでも駆けつけていただける。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	「認知症の人と家族の会」の冊子を参考に家族会との勉強会を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	家族会代表、市の介護保険課等の意見を聴きサービスの向上を図っている。自己評価、外部評価結果も会議で報告している。	家族会正副会長、地区区長、地区区長会長、介護相談員、地域包括支援センター職員、広域連合職員などが出席し2ヶ月～3ヶ月に一回開いている。ホームの活動報告や市からの要望等があり相互に意見交換をしている。出席者からは地域の話しや情報が得られており、職員会議で報告されている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の担当者が入れ替わると気楽に話し合うことが難しい場面がある。毎月二回訪問している相談員とは良い関係が築けている。	何か不明なことや困ることがあれば出かけて行き、市や広域連合の担当部署には相談をかけている。市派遣の介護相談員が毎月二回訪問している。介護認定調査もホームで行い、市職員が訪れ、家族とともに職員が立ち合っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の弊害について職員がよく理解して、入居者と関わっている。	内部研修が行なわれており、職員も身体拘束をしない支援に取り組んでおり、現在その様な状況にはない。外出傾向の方には他の入居者から「いいのよ、ここに居れば!」との声かけがあり落ち着いているという。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待についての職員研修を開き、身体拘束廃止について定期的に話し合いをしている。		

グループホームすずらん

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護、成年後見制度について研修会を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居改定時に十分な話し合いを行い、理解、納得を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会を通じ意見を集約し、それらを運営に反映している。	家族等とは顔見知りになっており、家族のほうからホームに対する気づきや全体の雰囲気についての感想などが上がってくる間柄となっている。ホームからも家族等にホームへの来訪を呼びかけており、頻繁な方は週に1回訪れている。家族会の総会では家族同志が心を開いて話ができることから、横の連携も取れている。コミュニケーションを円滑にする手段として手書きの「すずらん通信」が発行され、入居者別の便りとともに家族のもとへ送付されている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月一回の職員会や職場以外の場所での交流の機会を作り、意見や提案を聴く機会を設けている。	毎月8日に職員会議が開かれている。全職員参加のもと話し合いや内部研修、モニタリング、時には勉強会で学習したことのテスト等もある。一ヶ月に2~3人、ホーム代表者が職員をレストランやカラオケなどに誘い、意思疎通を図っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者が必要に応じて個々の職員と食事会を行い、本人の希望や提案等を取り入れるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修会には積極的に参加させ本人の技能等の向上を図っている。また日本福祉大学への入学を積極的に薦めている。現在二名在学中である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修会等で知り得た友人と積極的に管理者間、職員間、共に交友関係を育てている。また双方とも施設を訪問し会っている。そして介護技術の向上に努めている。		

グループホームすずらん

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に事前に本人等に施設を見学していただき本人と話し合いを行っている。 最低三回以上は行う。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人入居前に家族等にホームを訪問していただき話し合いを行い、要望等を聴いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	介護支援専門員が本人と家族等から行けんを聴き、支援の方向性を見極め、その後その情報をフィードバックしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者個々の生活歴や出来ること、得意なことを職員は熟知している。得意分野で力を発揮することで生活への張りや生き甲斐につながるようにと職員は個別サービスの支援を行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族会等を通じて家族同士の融和を図りつつ本人を支えていく関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	隣組友人等のホームへの訪問を積極的に支援している。	家族には了解を得て自宅隣近所の方や幼なじみの方の来訪を受け入れ、居室で歓談している。家族と共に馴染みの美容室へ出掛ける方もいる。若干名ではあるがお盆に帰省する入居者もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	鈴棟、蘭棟の相互の交流を行い、楽しい生活の場を提供するように努めている。		

グループホームすずらん

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	家族会等を通じホームから他の施設へ移動した入居者について訪問等を行い、家族等とも連絡を取り合っている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者本人と時間をかけて話し合い、意向の把握に努めている。	約半数の入居者が意思表示できる。職員との信頼関係から介助の際に、ジョークを発する入居者もいる。入居前にホームを見学してもらい、納得した上でサービスの利用を開始している。入居前の情報と入居後の様子が違って困るようなことはない。意思表示が難しい方には家族などから聞き取った生活歴や仕草から思いを把握している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族等から必要な情報を提供してもらい経過等の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員研修会を行い一人ひとりの心身状況等の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアに見直しについての会議を行い、介護支援専門員が必要な情報を報告し家族等からサインをもらっている。	一ヶ月毎に各ユニットの担当職員を替えるシステムを継続しており、全職員が2ユニットの入居者の状態やケア計画を把握している。毎月8日に実施する職員会議後のモニタリングや朝・夕の申し送り時に職員の意見を聞き、計画作成担当者が計画を三ヶ月毎に見直している。状態の変化が徐々に進むことはあるが急激な変化は少なく大きな見直しもなく、月々のローテーションを組み、一ヶ月に数人の見直しをしている。作成された介護計画については入居者や家族に説明し承諾を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日朝、夕、職員会で情報を共有し見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	必要な範囲でリハビリ等を行っている。		

グループホームすずらん

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者本人、家族等の意向を踏まえ他の施設への転換も図っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時に協力医との面談を行い、医療についての認識を深めてもらっている。また、かかりつけ医とは二十四時間体制で臨んでいる。	入居者や家族の了承を得て主治医をホームの協力医に変更している。協力医による往診が月1回、第4週の木曜日にある。24時間連携しており、必要になった場合には緊急の治療が受けられるようになっている。通常受診については基本的に家族の付き添いをお願いしている。准看護師も常駐しており医療機関と連携をとりながら対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ホームの看護師、協力医に必要なに応じて情報を提供している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院、ケースワーカー等との情報交換や相談に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	「終末期の意向確認書」及び「事前指定所」等により、家族との話し合いを行っている。	「終末期の意向確認書」があり入居者家族等から頂いている。直接の看取りはないが、医療や看護が必要となる直前までホームで過ごし病院に入院後数日で最期を迎えられた方もいる。本人や家族との話し合いの中で事前に希望する搬入先医療機関を決め、安心して納得して過ごしていただけるよう支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	広域消防による「応急手当講習会」や、協力医による初期対応についての勉強会を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域消防署等との連携を図り、訓練等を行っている。	消防署や地域の消防団の指導を受けながら年1～2回の避難訓練を実施している。今年度も9月に避難訓練を実施し、入居者も含め3分ほどで全員避難を完了した。夜間も2人の夜勤者が巡回を行い、入居者の介護とともに安全確保にも努めている。昨年度スプリンクラーが設置され防火体制も整備されている。地元地区との防災協定についても検討している。	

グループホームすずらん

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉掛けには必要以上の注意を行い、誇りやプライバシーを損ねないよう心掛けている。	入職時に人生の先輩である入居者一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねない対応について教育している。各職員から誓約書もとっているため秘密保持の徹底も図られ浸透している。職員の対応について満足のいかないような場合にはホームの代表者が直接本人に注意を促している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	傍に寄り添い入居者本人とじっくり時間をかけて話し合う機会を設けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	なるべく希望に沿うように努力している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	全職員が積極的に支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者と職員が共同して楽しく関わっている。	献立のメニューは職員が立てている。食事については自立している方が殆どで、ゆっくり時間をかけて食べている方もいる。食形態もキザミの方、トロミの方が若干名いるが常食の方が殆どである。職員も食事中はお茶をすすめたり料理の味を聞いたり、楽しみながら食事ができるように務めている。入居者も配膳や下膳、食器洗い、食器拭きなどできる範囲でお手伝いしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日食事量、水分量を記録し、個々に入居者の状況に応じて支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔状態の確認をしている。		

グループホームすずらん

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	毎日の排泄時間を記録し、その中から各入居者のパターンを把握して、トイレでの排泄を促している。	排泄パターンに沿って声がけし、トイレでの排泄に心がけている。時々失敗をすることもあるがオムツに頼らないように支援している。睡眠を重視し夜間のみオムツを使用する方が若干名いる。居室へのポータブルトイレの持込は全くない。昼食前、手びきで誘導する職員の姿を見ることができた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	無理のない範囲で運動への参加を促し、食事は栄養バランスを考えて提供している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入居者の希望に応じて入浴日以外であっても入浴を行っている。	ユニット毎に入浴日が決められており、両ユニットの入居者が昼食時間を除いた午前10:00から午後3:00までの時間帯で入浴している。夏場はシャワーや清拭等に対応することもある。浴槽、洗い場ともに家庭風呂と同じ大きさで、体調の優れない入居者には職員二人で対応している。入浴を拒む方が若干名いるが無理強いせず納得していただけるよう時間をかけ言葉掛けしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居者の意思を尊重するようにし支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎日の引継ぎにて確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	職員等と買い物や散歩に出掛けて気分転換を図っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	入居者本人の希望によって職員又は家族と、戸外に出掛けている。	歩行が自立している入居者が半数ほどおり、ホームの敷地内を毎日散歩したり、中庭のウッドデッキに出て外気にふれている。ホームの食材の買出しも兼ねて買物にも交代で出掛けている。家族同伴で買い物や食事、お墓参りに出掛ける入居者もいる。天気の良い日にはパラソルの置かれた駐車場脇の広いウッドデッキでピクニック気分を楽しむこともある。	

グループホームすずらん

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者本人の要望により、お金を所持したり使えるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	管理者が手紙作りを積極的に行い、また家族等との専用電話により、いつでも自由に話が出来るようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	生活観、季節感は随時取り入れている。	食堂やリビング、廊下などの共有空間はユッタリとしたスペースが確保されている。広い天窓からの採光や床暖房、エアコン、空気清浄用の循環システムなど環境づくりにも配慮がされている。畳敷きの小上がりや廊下に沿って作られた2畳ほどの畳敷きの空間など、和の部分も取り入れ癒しの効果もある。中庭や駐車場脇に設けられたウッドデッキで昼食をとったり日向ぼっこしながら歌うなど憩いの場となっている。お風呂やトイレの手すりを増やす予定もあり、今後の入居者重度化への対応にも配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳コーナーやウッドデッキ等を設け、ゆっくり話し合いが出来る場所を提供している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の協力の下、本人の希望を取り入れている。	居室の入り口にはホーム代表者手作りのキルトの表札が掛けられており目印となっている。居室にはベッド、クローゼット、洗面台が備え付けられており、清潔で整理整頓がされている。小さな筆筒や衣裳ラック、小物入れ、家族の写真などが置かれている居室も見うけられた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自立生活に向けて安全な環境を整備し工夫している。		